

ピーマン技術情報 No. 3

～9月からの栽培管理と来作に向けた準備について～

★管理のポイント★

- ◇天候を考慮したかん水を心掛けましょう。
- ◇圃場を観察し、効率的な病害虫防除を行いましょう。
- ◇大雨・強風に備えて、ほ場の整備等、事前対策を行いましょう。
- ◇片付けや土づくり等、来作に向けた準備を今年から始めましょう。

1 「9月～収穫終わりまで」の栽培管理について

(1) かん水

気温が徐々に低下し、盛夏期に比べて水分要求量は少なくなっています。

台風等による大雨が降りやすい時期となるので、露地栽培では、マルチ内の水分をよく観察してかん水量を加減しましょう。

また、ハウス栽培では、特に晴天時に高温・乾燥状態になりやすい状態となるので、天気を考慮しながら、少量・多回数のかん水を心掛けましょう。

〈ハウス栽培のかん水量の目安〉

9月：株あたり約3L（曇り）～約4L（晴れ）

10月：株あたり約2L（曇り）～約3L（晴れ）

表1. 露地栽培のかん水量の目安（L/株/日）

	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月					
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
露地							0.5			1.0			2.0			3.0			2.0			1.5					

(2) 温度管理（ハウス栽培）

気温は、最低気温 16℃をめぐりに保温を開始します。

気温の低下が予想される日は、早めにハウスの入口、側窓を閉め、夜温を確保するようにしましょう。

ハウスを閉め切ることが多くなると、湿度が上昇し、病気が発生しやすくなるので、日中は少しでも換気を行い、ハウス内の空気を動かしましょう。

(3) 生理障害果の発生防止



赤果

乾燥や草勢低下により、肥大に日数がかかることで発生する障害果です。

対策として、追肥や垂れ枝の整理をして草勢を維持するとともに、適期の収穫に努めましょう。

(4) 病害虫防除

圃場をよく観察し、防除暦を参考に、防除を行いましょう。



斑点病

感染後、発病するまで7日～10日ほど潜伏期間があるので、被害葉を発見したら、摘葉し、圃場から持ち出しましょう。

摘葉・防除を行い、伝染源を減らしましょう。施設栽培では、換気を行うことも効果的です。

2 大雨・強風対策について

(1) 事前対策

- ① 収穫可能な果実はできるだけ事前に収穫します。
- ② 防風ネットを設置している場合、緩んでいるワイヤーや針金を張り直し、ネットの破れている部分は補修します。
- ③ パイプハウスは、ハウスバンド（マイカ線）が切れていないか、緩んでいないかを点検するとともに、ビニールの破損があれば補修しておきます。また、筋交いなどで補強し強風に備えます。
- ④ 強風で支柱が抜けたり、倒伏したりする恐れがあるので、畦の両端や畦の所々で支柱を補強し、株の倒伏を防ぎます。
- ⑤ 支柱・ネット等への茎葉の誘引状況を点検し、しっかり固定します。

(2) 事後対策

- ① 滞水しているところでは、圃場周囲の排水溝の補修により速やかな排水を図りましょう。
- ② 病害予防のため、殺菌剤の散布を行いましょう。
- ③ 草勢回復を図るため、液肥の葉面散布を行いましょう。
- ④ 酸素供給剤を使用し、根の酸素欠乏状態を軽減しまししょう。

3 来作に向けた準備について

(1) 今後のスケジュール

来作に向けて、土作りを中心にほ場の状態を整えましょう。

表2. 9月以降の圃場管理の目安

～10月	収穫、整枝、追肥、草刈、防除、(土壌診断申込)
収穫終わり後	(株が枯れた後に) 抜き取り、資材片付け
11～12月	土作り①(物理性、生物性改善) 堆肥投入(2t/10a程度)、投入後耕起
3月下旬～4月	土作り②(化学性改善) (ほ場が乾き始めたら) てんろ石灰等投入、投入後耕起
定植1週間前	土作り③(化学性改善) 基肥投入、投入後耕起

(2) 土壌診断

定期的(2年に1回など)に土壌診断を行いましょう。特に、新しいほ場で栽培を検討している方は積極的に診断を行ってください。

土壌診断では、土壌の化学性について知ることが出来ます。診断結果をもとに施肥を加減することで、生育障害のリスクを下げ、施肥にかかる費用を抑えることが出来ます。

土壌診断は、JA おおふなとで受け付ける予定です。土壌の採取方法、提出の仕方や日程については、JA おおふなとからの案内をご覧ください。

(3) 今年やっておいた方がよいこと

・圃場の片付け

病気を来作に持ち越すリスクを少なくするために、年内に株の抜き取り等の圃場の片づけをして、次の年に備えましょう。

・堆肥施用

堆肥の施用は、作物の養分供給の他に、水持ちや水はけ等の物理性、生物性を総合的に改善し、地力の向上を図ることが出来ます。物理性の改善は時間がかかるため、年内に牛ふん等の堆肥を投入し耕起を行いましょう。

☆☆☆農薬は正しく使いましょう！☆☆☆

使った農薬は使用履歴を記帳し、適正使用を徹底しましよう。

ラベル記載の「適用作物名、使用数量(希釈倍率)、使用時期、使用回数」は要チェック！

★★いわてアグリベンチャーネットメールサービス会員募集中★★

メールサービス会員登録はこちら URL : <https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/maillinglist.htm>

岩手県内の農業技術情報や病害虫に関する情報、各地域の情報など掲載中！